

ジェンダー・トラブルの観点から 『紅楼夢』を読む

福嶋 亮太

著者の合山究氏はベテランの中国文学者であり、『紅楼夢』についてもすでに優れた研究書『紅楼夢』新論(汲古書院刊)を上梓している。しかし、本書は一風変わった視座から書かれている。すなわち、合山氏によれば、『紅楼夢』の主人公・賈宝玉は実は「性同一性障害者」(身体の性とおこころの性が一致しない者)であり、その住居である大観園は、賈宝玉の願望が投影された「ユートピア」として理解されるべきというのだ。

実のところ、賈宝玉の性格は何とも奇妙である。彼は一方では、ポリガミ的な欲望にのっとり、多くの女性を周囲にはべらせることを好む猥色家に見える。しかし他方では、男性性を強く嫌悪し、林黛玉や薛宝釵ら少女との戯れに興じる

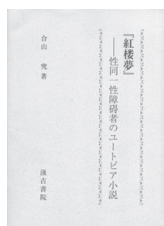
中性的な人物にも見える。つまり、『紅楼夢』は、あまたの「淫書」にも通じる物語のフォーマットを採用するにもかかわらず、そこから男根的な要素を慎重に抜きとり、柔らかな女性性を物語全体に充満させている。合山氏は、この謎めいた世界観に対して、正面から説明を与えようとした。賈宝玉に「性同一性障害」(GID)を見出す仮説は、まさに『紅楼夢』の奇妙な作品世界を整合的に解き明かすために用いられるのだ。

たとえば、賈宝玉が当時の女性のシンボルカラーであった「赤」の衣服を好むこと。あるいは、涙もろく、女性のおいに対して非常に敏感であること。合山氏によれば、こうした描写は変態性欲の現れではなく、むしろ「女性との

合山究者

『紅楼夢』

—性同一性障害者のユートピア小説



A5判 290頁
汲古書院 [7350円]

同化」の願望を示している。また、賈宝玉は淫乱や性交に対してきわめて消極的であり、女性との接触においても情欲ではなく親愛あるいは崇拜の念が強調されるが、それも性的アイデンティティの揺らぎに由来するものとして捉えられる。さらに、儒家的な礼法を軽視し、親の忠告も聞かず、幼児的なところを多々残した賈宝玉の性格も、既存の性役割に馴染めないGIDならではの症候と解釈される。このように、「今古未見の人」(脂硯齋)と呼ばれた賈宝玉の数々の謎めいた振る舞いに対して、一定の精神病理的な解釈が与えられていくことになる。

むろん、賈宝玉を「性同一性障害者」

として実体化するのが正しいかどうかは、彼が架空の存在である以上、厳密には証明不可能である。確かに、合山氏が言うように曹雪芹自身が性同一性障碍者であり、そのアイデンティティを下敷きにして賈宝玉が造形された可能性は否定できないが、その点もやはり確証できるわけではない。賈宝玉についての作中の記述は、「実体（病理）」というよりは「表象」（イメージ）だと理解するのが、おそらくいちばん穏健な考え方だろう。

とはいえ、ここで重要なのは、実体的な性同一性障碍者に比定し得るほどに、賈宝玉が根深いジェンダー・トラブルを抱えていることである。本書は、現在の性同一性障碍者へのヒアリングやGID関連文献の記述を随所に挟み込みながら、賈宝玉のジェンダー・トラブルの諸相を詳細に跡づけている。

ジェンダーを中心に置くと、小説の読み方はおのずと変わってくる。たとえば、『紅樓夢』を曹雪芹の「自伝小説」と読

む見解は、胡適や俞平伯以来、根強く存在する。しかし、仮にその見解を受け入れるとしても、この小説にジェンダーの混乱があちこちに仕込まれていること、そしてその混乱を媒介として、新しい表現領域がつかみ出されていることは、紛れもない事実である。したがって、『紅樓夢』に曹雪芹の私的体験が反映されていることと、その自我を輪郭づけるのに、弱体化した男性性や多種多様な女性性のイメージが用いられることは、あくまで別の論理によって位置づけられねばならない。

こうした問題には、すでに学術的にも関心が向けられている。たとえば、昨今のアメリカの明清小説研究においては、ジェンダーやセクシュアリティはもはや不可欠のテーマとなっているが、それはポストモダン的な知的意匠の現れというよりも、もう少し切実な問題意識に根ざしているように見える。実際、もしジェンダー・イメージを細かく操作することによって、物語世界に内実を与えていく

という振る舞いが明清小説を深く規定しているならば、むしろそれらのテーマ抜きで作品を理解することのほうが難しいだろう。

本書でも、賈宝玉のジェンダー・トラブルが、性愛未満の情緒のやりとりをいかに駆動しているかが詳しく述べられる。たとえば、合山氏は、賈宝玉が秦鍾という優しい美少年と、一種の擬似同性愛的な――つまり親密だが、セックスに至ることはない――関係を結んでいることに注目し、そこに賈宝玉の性自認（あるいは性指向）の特色を見出す。さらに、儒教的な貞節を重んじるまじめな薛宝釵との結婚生活がうまくいかず、「児女の真情」に基づく奔放な林黛玉に惹かれ続けることも、GIDの症候の一つとされる。

科挙によって支えられた、男性中心的な文人・官僚世界には決して出てこないこの種の感情のパターンは、『紅樓夢』の本質を成していると言えるだろう。賈宝玉の対人コミュニケーションは確かに、社会的な建前よりも情緒的な同調性

〔情投意合〕「情意相投」「一個心」……を、成熟した大人の関係よりも子どもじみた戯れを優先しているのだ。

本書の最大の価値はおそらく、その特徴的なコミュニケーション様式に、一本の芯を通したことにある。合山氏が言うように、これまでの『紅樓夢』論は、ときにあまりにも性急に政治的読解——たとえば「封建家族への批判」というような——に傾いていた。しかし、賈宝玉におけるジェンダー・トラブルという観点を挟みこむならば、そうした単純すぎる議論は退けられる。『紅樓夢』は、賈宝玉の性的アイデンティティを当時の社会の価値観からいわば半歩ずらすことによって、新しい感情、新しいコミュニケーションの所在を浮き彫りにした。本書は、その表現領域を政治的文脈に還元することなく把握しようとする、一つの野心的な試みだと言つてよい。

最後にもう一点だけ付け加えたい。仮にジェンダー・トラブルの物語として

『紅樓夢』を理解するならば、やはり同時代における反応が見逃せない。特に、『紅樓夢』への一種の批評行為としては、その「続書」がきわめて重要である。

繰り返せば、『紅樓夢』の本編では、賈宝玉の狐色家としての側面は抑えられている。しかし、後代の作家たちが発表した『紅樓夢』のあまたの続編（続書）においては、その抑圧はしばしば解かれることになる。北米の気鋭の研究者キース・マクMahonが論じるように（Keith McMahon, "Eliminating 'Traumatic Antinomies: Sequels to Honglou meng' in M. Huang ed. *Snakes' Legs*, 2004）、一部の続書——『綺樓重夢』や『紅樓幻夢』など——では、賈宝玉は生まれ変わって性的に解放された結果、林黛玉や薛宝釵ら多くの妻を同時に抱える、ほとんど西門慶ばりのポリガミストとして描かれる。『紅樓夢』本編では、大観園という「ユートピア」は崩壊の憂き目にあうが、続書では、そのトラウマティックな「失敗」は巧みに除去され、賈宝玉の幸福がさまざま

まなやり方で追求されるのだ。

むろん、本書の論調を踏まえて言えば、それら続書はG I Dに対して無知であり、したがって『紅樓夢』という作品を理解しそびれているということになるかもしれない。しかし、マクMahonならば、むしろ続書においてこそ『紅樓夢』の秘められた要素や欲望が露骨に解放されているのであり、そこにも『紅樓夢』の——あるいは『紅樓夢』を生み出した時代の——本質が認められるべきだと考えるだろう。ここには、本書とはまた違った理論的態度があり得る。

もとより、合山氏自身、『明清時代の女性と文学』（汲古書院刊）という大著では、明清小説全般にわたって、そのジェンダー・イメージをめぐる議論を展開していた。特に、そこで触れられる「男性的な妓女」や「武俠的女性」などのイメージは、『紅樓夢』以外にも、男女の境界を書き換え、文学的表現を再構築しようとする機運があったことを示している。本書では（賈宝玉に病理学的解釈を施

そうとする立場からして当然だが、『紅樓夢』以外の作品にはあまり言及がなされない。しかし、『紅樓夢』と、続書も含めたその周辺の作品とがいかなる連関にあるのかは、今後改めて検証される必要があるのではないだろうか。

いずれにせよ、明清時代の文学において、自我を綴ったり、テクストを組み立

教科書の体裁をとった文法書

矢放 昭文

てたりする際に、ジェンダー・イメージが格好の素材であったことは確かである。そして、その素材の扱いにおいて、『紅樓夢』はある意味では最も特徴的で、また最も過激な方法を示している。本書は、この空前の作品に一本の芯を通すために、賈宝玉のトランスジェンダー性を強調した。英語圏に比べると、日本の中

はなれたところにいる相手とコミュニケーションをとる方式は、少なくともこの二〇年の間に劇的に発展し変化をとげてきた。ネット社会の到来とともに誰もがその果実をたやすく得られるようになっており、少しの手軽な操作を身につけるだけで、語学を学ぶのに有効な素材、貴重な語音にも接することができるよう

従って、学ぶ者のモチベーション、好み、

都合や学び方、選択の幅なども急速に多様化すると同時に、伝えられる内容や情報が加速度的に陳腐化する事例を挙げることもそれほど難しいことではない。

「従来型」の語学教科書も、教育機関などで制度上の縛りをかけて販路を確保しないかぎり、いくら内容や使用メディアに工夫を尽くしたとしても、その斬新さを以て普及させる行いにはすぐに賞味

国文学研究は、ジェンダーやセクシュアリティのテーマの導入には総じて消極的だが、それはいささか残念なことだ。本書を契機にして、『紅樓夢』をジェンダー面から大胆に読み替える試みが続いていくことを期待したい。

(ふくしまりようた 批評家・中国文学者)

張淑儀・上神忠彦編著
身につく広東語講座



A5判 304頁 (CD2枚付)
東方書店 [3150円]

期限が迫る。活字を通じて学び手に語学教材や情報を提供するという方法は、すでにその限界をすぎているのかもしれない。中国語の教育と学習をめぐる状況もほぼ同様のはずである。

張淑儀・上神忠彦氏の著わされた『身につく広東語講座』も、古典的な「従